

# わたしたちの人権

180

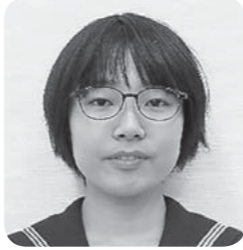
誰もが人間として生きていくうえで  
 侵すことのできない当然の権利  
 これが『人権』です

## 子どもたちの 人権作文

12月の人権旬間にあわせて、子どもたちが書いた人権作文を1・2月号で紹介いたします。今月は、清和中学校2年折尾萌愛さん、矢部高校2年藤本絃幹さんの作文を紹介します。

### 今、私にできること

清和中学校 2年 折尾 萌愛



令和元年  
 七月十日の  
 朝刊、一面  
 の見出しの  
 「ハンセン病

家族訴訟・国が控訴断念」という文字が私の目に止まった。そして、私は思った。「ハンセン病問題はまだ終わっていない、今も続いている」と。

ハンセン病とは「らい菌」に感染しておこる病気で、感染症だがその感染力はとても弱く、非常にうつりにくい。しかし、日本では根拠のないまま隔離政策が始まり、一九三一年の「らい予防法」で強制隔離が法制化され、人々の心にハンセン病に対する偏見をうえつけた。薬の開発で治る病気となった今でも差別や人権侵害で苦しめられている

人たちがいる。

私がこのことを知ったのは人権学習でハンセン病についての学習をしたからだ。それまで病気の名前を聞いたことはあったが、それがどんなものかは全く知らなかった。深く学んでいくうちにハンセン病回復者の方々に対してどれだけ多くの人が正しい理解をせずに差別を続け、その差別がどれだけ多くの人を苦しめてきたのかを知った。

ハンセン病についての学習を深めていく中で私が許せなかったことが特に二つある。

一つは、差別・偏見の種となる原因を国が自ら植え付けたことである。ハンセン病になった人たちは療養所に強制的に隔離され、身体や衣服を徹底的に消毒されたり、また、患者の家も、真っ白になるまで消毒されたりした。国はハ

ンセン病患者に対する差別・偏見を無くそうともせず、逆にハンセン病は恐ろしい病気だと人々に植え付けるような政策にとっても腹が立った。

もう一つは、ネット上にアップされたコメントだ。「町でハンセン病患者を見かけました。病気をうつされるのではないかと恐怖心も感じました。もしうつるのなら、田舎にでも隔離した方がいいと思います。決して差別しているわけではありません。」と自分の責任を放棄し、ハンセン病回復者の人たちを差別していることに気がついていないことに、また腹が立った。

この二つに共通して言えることは差別・偏見をしている人が正しい理解をしていないことだと思う。知らず知らずのうちに差別をしていたかもしれない。

実際に、本当かどうか分からない情報をうのみにして、うわさされていた人を嫌な目で見たり、無意識にさけてしまふことがある。そんな私はまちがった理解をして差別をする人と同じだ。学習を終え、正しい理解をすることの大切さを知った今では絶対にしない。決めつけ・差別・偏見は命を奪う行為となることもあるからだ。これからは、軽はずみな言動を信じない、言わない。そして言っている人がいたら注意をしていきたい。

七月十日の朝刊で、ハンセン病回復者の家族の方への差別被害が認められた。ハンセン病問題に関する差別は患者本人だけでなく、その家族までも苦しめたのだ。私にはハンセン病になった方々や家族の方々の苦しみは実際には分からない。でも、家族との縁

を切り、名を変え、療養所に隔離される立場におかれたら苦しくて、辛くて、耐えられないと思う。

私は今、新聞記事の中にハンセン病に関するものを見つけると読むようにしている。それは、正しい理解をすることの大切さを知ったから。そして、もし、まちがった理解をしている人がいたときに正しいことを伝えるためだ。

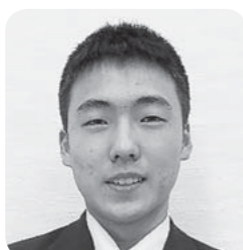
「ハンセン病はとても感染しにくい病気です。しかし、国の隔離政策により患者の方やその家族の方までも差別を受け、今だに苦しめられています。まちがった考えを捨て、正しい理解をしてください。そして、その正しい知識を伝えていってください。」と。

最後に、正しいことを理解すること、理解しようとする気持ちを持つことが大切だと

思う。そういう人が増えていけば、ハンセン病問題に限らず、他の差別問題も減っていくと思う。

### 知らないうちの差別

矢部高校 2年 藤本 絃幹



皆さんは、差別やいじめをしていない自信はありますか。

私は、毎日バスに乗り登下校をしています。この前バスに乗って帰る途中に、サンングラスをかけ、杖をついている人を見かけました。その人はバスに乗ると杖で足元を確認しながらイスを探していました。それを見た私は「他の人と違うじゃん。かわいそう」と思ってしまった。そこで私は、「これも差別だ」と気が

れど、他の人と何もかわらないのに、かわいそうと勝手に思ってしまったことに、無意識のうちに差別をしてしまっていました。

私はこの経験を通して、この無意識の差別をできるだけなくすることが重要だと思えます。障がいのある人を見たと、「あー、あの人皆と違うからかわいそう」ではなくて「困っているなら、手助けしよう」と考えていくようにしていこうと私は思います。

昔から続いている差別を完全になくすることは、とても難しいことかもしれません。ですが、少しずつでも減らしていくことはできると思います。個人個人が自分の差別や偏見に気づきそれをなくそうと思えば、絶対に減っていくと思います。